令和元年度　足羽高等学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1　教　務	①　各グループで年2回の公開授業期間を設ける。 ②　授業の様子や課題提出状況等について教科担任とクラス担任が情報共有し連携を密にするとともに、考査前後の個人面談を充実させる。	①　昨年度に引き続き公開授業・研究協議を実施することにより、9割以上の教員が「自分の授業が改善した」と感じている。また、生徒の授業満足度についても、「満足している」と答えた生徒は8割を超えた。しかし、公開授業や授業参観が「あまりできなかった」と答えた教員が3割いて、昨年度より1割増加したので、この点を改善する必要がある。 ② 課題の提出状況については、教科担当が細かく点検し成績に反映させることができており、気になる生徒の情報交換も必要に応じて行っている。 しかし、家庭学習の状況をみると、普段も試験前も全くやっていない生徒はわずかに減ったものの、普段から学習に取り組んでいる生徒は半数にすぎず、例年と変わっていない。引き続き、家庭学習に取り組ませる指導が必要である。	・グループごとの公開授業や授業参観がスムーズに行われるように、グループリーダーからの働きかけを促すとともに、保護者向け公開授業の時に教員も自由に授業参観できるようにするなど、授業参観しやすいやり方を工夫する。 ・保護者の理解と協力を得られるように、クラス担任は保護者懇談会等で家庭学習について情報交換する。また、教科担任は課題等を工夫して家庭学習を促すとともに、提出状況が悪い生徒への指導を徹底する。
2　生徒指導	①　全教職員・生徒・保護者が共通理解のもと正しい身なりの徹底を図る。また、引き続き交通マナーの向上を図る。 ②　生徒会各種委員会や部活動の活性化を図るために、積極的広報活動を行う。	①　保護者の協力なども得て全教職員が登下校時の交通安全や容儀指導等に継続的に取り組むことができたことで、容儀や交通安全への意識は少しずつ改善された。ただ、教職員の90％近くの生徒の容儀や交通マナーの注意指導に取り組んでいるにもかかわらず、教職員の目にはそれが成果となって現れていない（生徒の自覚との隔たりもある）。教職員全体が生徒指導に対して今以上に共通理解と共通意識をもち積極的に生徒の更なる意識向上を図る必要がある。 ②　部活動については教職員の積極的な取り組みもあり、どの部も活発に活動し、各種大会等でも一定の成果を収めた。生徒会各種委員会の活動は、生徒の自主的な活動を促すことにより、全体的に活性化された。ただ、部活動や各種委員会活動への取り組み状況については保護者には十分に理解されていない部分も見られる。	・制服の着こなし、安全や交通マナー遵守の意識向上のために、これまでと同様に保護者の協力を得ながら登下校指導に取り組むとともに、学校生活の中では全教職員が生徒への同じ声かけ、同じ指導を徹底させることで、生徒の容儀や交通マナーへの更なる意識向上を図っていく。また、各授業においても、必要な場合は教科担当者から生徒への注意・声かけを徹底してもらい、その上で必要に応じて生徒指導部との連携によって、よりきめ細かく丁寧な生徒理解・生徒指導を推し進めていく。 ・生徒の自主的活動を促すことにより、生徒会各種委員会活動を一層活性化させる。各種ボランティア等に関する情報を生徒にアナウンスすることで、特に部活動をしていない生徒が時間を有効に使い活躍できる場を設けていく。 ・部活動や各種委員会活動における生徒の活躍の様子を本校ホームページなどに掲載し発信することで、保護者の理解を更に深められるような工夫をする。
3　進路指導	①　3学年を見通した系統立った進路ガイダンス、進路学習を企画運営し、生徒に意欲的に取り組ませる。 ②　生徒の進路選択や教師の進路指導に生かすため、学力診断や模試・各種検定の事前指導と事後指導を充実させ、学習意欲の向上を図る。	①　例年と同様の進路ガイダンス等を実施し、生徒はガイダンスを通して進路について考えていた。意欲的に取り組んだ生徒の割合は88％であるが、今後も方法を改善しながら取り組みを継続していく。 3年保護者からは本校の進路指導に対して概ね理解を得られている。これは担任の先生の指導や面接、小論文など全教員による指導のおかげであると思う。 ②　年3回の学力診断テストや模擬試験等の結果を見て81％の生徒は目標や課題を把握することができている。今年度から記述式の基礎力テストを実施しており、書く力や表現する力を育てるとともに平素の学習や進路実現に繋がるようにする。 英語検定は大学入試での実施が見送られたが、今までどおり活用する大学・短大もあり、今後も各種検定試験に積極的に取り組ませるよう指導していく。	・1，2年生の取り組みを高めるために、総合学習の時間を活用して進路ガイダンス後の記録を書かせて1年間のまとめと次年度へのつながりを意識させるようにする。 進路指導について、引き続き学年会の先生や保護者と連絡を取り合って、生徒一人ひとりの進路実現をサポートしていく。 ・基礎力テストを受けるだけにならないよう、そのための事前学習や事後の振り返り教材を活用するとともに、担任との面談等に役立てる。 検定試験が今後の進路実現に役立つことを知らせることにより、受験者数を増やしていきたい。また、学校独自の補助金についても利用できることを周知する。
4　保　健	①　心身の健康に関する情報を適宜発信し、検診などを通して健康管理に対する意識を高める。 ②　日々の清掃状況を点検・確認し、生徒の清掃・美化に対する意識や態度の向上を図る。学校周辺の清掃も定期的に行う。 ③　定期的点検と指導により、教室におけるゴミの分別の徹底を図る。	①「健康の維持・管理に留意して生活する」について、生徒自身の評価は、88％と少し上がった。しかし教職員の評価は97％から86％に下がった。保護者の評価は79％（−1％）だった。情報の発信について更に工夫をしたい。 ②「まじめに清掃活動に取り組む」について、生徒自身の評価は91％と昨年より少し向上した。しかし、教職員の評価は88％と若干昨年より低下した。清掃の現状には、監督場所などで改善の余地もあり、全体的により丁寧な清掃が行われるようさらに工夫を要する。 ③「ゴミの分別」については、できたと答えた生徒が97％（±0）、教職員の評価は94％（−1）であった。家庭で子どもが分別に協力すると答えた保護者は77％（−14）で昨年から大きく減少した。学校内での分別状況は定着してしてきているので、家庭との連携も含めて、さらに丁寧な分別が行われるように指導を徹底する。	・引き続き、健康に関する情報を保健だよりや全校集会等で努めて発信する。また、朝の健康観察を引き続き実施し、健康管理への教員と生徒の意識を高める。 ・清掃については、指導・監督のしやすい監督割当を工夫する。 ・ゴミの分別については、定期的に点検を行い、全校集会など機会を捉えて具体的な指導・注意を行う。また、学校だけでなく家庭や地域でも実行し習慣化するよう指導する。
5　図書渉外	①「朝読書」をはじめとして、生徒の読書意欲を向上させるための環境づくりを行う。 ②　学校と保護者の連携を高めるために、事業内容を工夫したり、これまでの連絡体制のさらなる充実を図ったりする。	・　生徒が読書に親しむ環境作りに「取り組むことができた」という教員の回答は74％で、目標値をやや下回り昨年から1ポイント増加した。 ・　朝読書で 「2学期末までに2冊以上の本を読み終えた」という生徒は54％で目標値を昨年度よりも8％減少した。「読書に対する興味や関心がある」と答えた生徒は58％で目標値65％を少し下げた。全体的に読書停滞傾向にあり、読書に対する関心度の高さと読書量は相関関係があることから、関心度と読書量の少ない約3割の生徒をいかに少なくしていくかが今後の課題である。 ・ 保護者に対する本校の情報発信手段について、昨年度と2％低い92％の保護者がほぼ満足しているという結果が出た。この高い満足度は、学校の情報手段と発信内容がうまく利用されていると捉えたい。	・　朝読書については、引き続き担任と副担任の協力を得て、静粛な中で読書ができる教室の環境作りをしつつ、教科指導等においても意識的に読書への誘いをしてもらう。また、生徒の読書量の増加と読書に対する興味・関心を高めるために、さらに魅力ある図書選定、図書館運営そして図書委員を中心とした図書館企画を考えていく。 ・　PTA総会、文化祭でのおにぎり作り、環境整備活動、進路ガイダンスなどより多くの保護者に参加していただきたい事業については、その内容や呼びかけ方をホームページや学校メールを利用してさらに工夫し、一人でも多くの参加者を増やす。 ・　ホームページについては適宜更新、PTAメールについては学校行事やPTA事業の紹介、特別時程などの早い段階での発信、広報紙「Asuwa」は生徒の活躍やPTA活動の紹介を中心に充実した紙面作りで、今後も学校と保護者の協力を高める一助としていく。
6　国　際	①　国際交流活動、国際理解講座や語学研修を通じて生徒の視野を広げ、異文化に対する理解を深める。 ②　中国語・英語検定試験の上位級やTOEIC・HSK(中国語版TOEFL)にチャレンジしたり、各種コンテストへ参加したりすることにより、語学学習への意欲の向上を図る。	①　異文化理解が深まったと感じた生徒は67％で、昨年比＋11％である。学校全体で取り組む姉妹校交流活動はなかったが、国際理解講座（総合）において全クラスに留学生や大学の先生に授業をしてもらったことが異文化理解の向上につながったと考えられる。 ②　生徒が目標とする検定試験やコンテストに積極的にチャレンジするために、国際科の教員同士の連携や検定試験対策の時間を確保することにより、生徒たちの意欲も高まると考えられる。目標級に全員が合格するまでには更なる指導が必要である。	・異文化理解を深めるために、国際理解講座（総合）は、クラス単位で実施し、留学生、ALTや大学の先生方の協力を仰ぎ、3年間での系統立てた内容にする。また、全校生徒が意欲関心を持って取り組めるように事前指導のより一層の充実を図る。さらに、学校内外に発信し、生徒の異文化理解への関心を喚起する。 ・検定試験やコンテストについて、今後も中国語科・英語科教員やALTによる継続的な指導を進めていき、語学学習への意欲や成績の向上につなげていく。普通科生徒の英語検定受検についても働きかけを強化する。